

## 『新訳・ソシユール 一般言語学講義』について\*

熊本 裕

1

Ferdinand de Saussure の *Cours de Linguistique Générale* (1916)が現代の言語学を方向づけたといえることはよく知られており、またこの書物が厳密には彼の著書ではなく、1913年に55歳で病没した著者が、1907年(1906-1907年の冬学期で、実際の講義は1907年の1月になってから始まった)、1908-1909年、1910-1911年の3回に渡って行った *Linguistique Générale* の講義を、出席した学生のノートをもとにして、これらの講義に出席する機会を持たなかった二人の弟子、Charles Bally と Albert Sechehaye が一冊の本の形にまとめたものであることもよく知られるようになった。

出版された書物としての「一般言語学講義」(CLG)と、入手できた数名の学生のノート、および Saussure 自身の講義メモの断片を比較することによって、この書物がどのように作成されたか、また Saussure の「生の」ことばが CLG にどのように反映されているか、を検証する最初の試みが Robert Godel, *Les sources manuscrites*<sup>1</sup>だった。また1958年になって、Bally と Sechehaye が利用できなかったもう一人の学生、Émile Constantin のノート<sup>2</sup>の存在が明らかになった。これは第2講義と第3講義のノートで、とくに Saussure の革新的なアイデアの中心部分を含む第3講義に関しては、他の学生のノートを遙かに凌駕する詳しさを持つと伝えられた。1967年から1974年にかけて出版された Rudolf Engler の *Édition critique*<sup>3</sup>は、CLG の初版と1922年の再版をもとに、本文の一つ一つのパラグラフ(総数 3281)に対してその典拠となる学生ノート(Constantin を含む)の部分と、当時知られていた限りの Saussure 自身のメモを対比させたものである。

Engler 版は、CLG のパッセージの背後に Saussure の実際の講義での発言を認めるためにはきわめて便利ながら、CLG の叙述に合わせて学生ノートを切り刻んで再配列するという方法のために、CLG に採用されなかった部分を含めて実際に行われた講義の流れを再現することは困難であった。そのため Bally と Sechehaye の作品である CLG からいったん離れて、学生ノートそのものの全体像を把握する必要があると理解されるようになった。Engler 版の完成から程なく、学習院大学(当時の)

---

\* 町田健『[新訳・ソシユール 一般言語学講義](#)』2016, 東京: 研究社。以下 website への link は2017年2月現在のものである。

<sup>1</sup> Robert Godel, *Les sources manuscrites du Cours de Linguistique Générale*, Genève 1957 (1969<sup>2</sup>).

<sup>2</sup> Danielle Gambarara と Claudia Mejía Quijano による第3講義ノートの完全な形での出版は2005年まで待たねばならなかった。“Édition des notes d’Émile Constantin du *Troisième Cours de Linguistique Générale* (1910-1911)”, *Cahiers Ferdinand de Saussure (= CFS)* 58, 2005, 73-80, 83-289. ここには数多い固有名詞の聞き違い・誤記などの訂正を含んでいる。

<sup>3</sup> Rudolf Engler, *Cours de Linguistique Générale, Édition critique*, 2 Vols., Wiesbaden 1968-1974 (1989-1990<sup>2</sup>).

小松英輔が、Genève 大学図書館が所蔵する Saussure 関連の資料をすべてマイクロフィルムに撮影し、それを書き起こすという大規模なプロジェクト<sup>4</sup>を開始した。このプロジェクトは国際的な共同作業に発展し、まず 1993 年に Constantin の第 3 講義のノート(の主要部分)が英語の対訳を伴って出版<sup>5</sup>され、次いで 1996 年に Albert Riedlinger の第 1 講義のノート<sup>6</sup>、1997 年に Riedlinger と Charles Patois の第 2 講義のノート<sup>7</sup>が同じ方式で出版された。<sup>8</sup>

CLG の編者の一人 Albert Sechehaye は、その準備過程で、最も重要な第 3 講義の学生ノートを、出席した数人(ただし Constantin を含まない)から借用し、互いの一致部分と相違部分を対比させた 478 ページに及ぶ collation を作成した。2015 年になってこれが、鮮明なカラー写真版とそれを文字色とレイアウトまでそのまま活字化したものが見開きページになった豪華本として出版された<sup>9</sup>。

Saussure 自身のメモについては、1996 年に画期的な進展があった。Saussure 邸の orangerie (一種の温室)の改修の過程で、Bally が CLG の序文で「失われた」と想定していた「一般言語学講義」の準備メモに相当するものが大量に見つかったのである。これらは「講義」そのものではないし、連続したテキストでではなく、時間的・論理的つながりも不明な断片類だが、Saussure が一般言語学の確立に向けて準備したものであることは間違いない。2002 年に Engler と Bouquet がこの断片を、1996 年以前に知られていて、Édition critique でも用いられた資料と合わせて出版し<sup>10</sup>、2011 年には Amacker が新資料のみを Engler とは別の配列で出版した。<sup>11</sup>

Saussure の遺稿といえるものは、「一般言語学講義」に関するものだけでなく、多岐にわたる。神話・伝説に関するものや anagram 関係のものは言語学以外の分野から注目を浴びたが、比較言語学に関するものとしては、20～30 歳代に field work を含め多くのエネルギーを注いだリトアニア語の

<sup>4</sup> 小松英輔「ソーシャルの原資料」(1983)、『もう一人のソーシャル』(2011)収録。

<sup>5</sup> Eisuke Komatsu and Roy Harris, *F. de Saussure. Troisième Cours de Linguistique Générale (1910-1911) d'après les cahiers d'Émile Constantin*, Oxford 1993.

<sup>6</sup> Eisuke Komatsu and George Wolf, *F. de Saussure. Premier Cours de Linguistique Générale (1907) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger*, Oxford 1996.

<sup>7</sup> Eisuke Komatsu and George Wolf, *F. de Saussure. Deuxième Cours de Linguistique Générale (1908-1908) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois*, Oxford 1997.

<sup>8</sup> これらは相次いで日本語に訳された。相原奈津江・秋津伶による『第三回講義』(2003; 増補改訂版 2009)、『第二回講義』(2006)、『第一回講義』(2008)、影浦峽・田中久美子による『第三回講義』(2007)。残念ながらいろいろも満足できる水準のものとはいえない。最後のものは、前者 3 点に比べると一見優れているように見えるが、原典で引用されている用例(ギリシア語など)を正しく表して論述を正確に伝えることすらできない低水準のものである。間違っていることすら気づかず、索引で同じ間違いを繰り返すほどで、とても商品として提供できるレベルではない。

<sup>9</sup> Estanislao Sofia, *La "collation Sechehaye" du Cours de Linguistique Générale de Ferdinand de Saussure*, Leuven 2015.

<sup>10</sup> Rudolf Engler, Simon Bouquet, *Écrits de Linguistique Générale*, Paris 2008. これを含む各国語版の評価については、松澤和宏『自筆草稿「言語の科学」』2013 参照。

<sup>11</sup> René Amacker, *Science de Langage. De la Double Essence du Langage*, Genève 2011.

アクセント研究に関する草稿<sup>12</sup>や、20 歳代初めに出版した「覚え書き(Mémoire)」<sup>13</sup>の延長上に位置づける「Sonant 理論」に関するもの<sup>14</sup>が出版されている。

Saussure 自身の生涯について、大規模な伝記と書簡集の出版が続いた。Claudia Mejía Quijano による *Le cours d'une vie. Portrait diachronique de Ferdinand de Saussure*, [Tome 1 Ton fils affectonné](#) (2008)は少青年期とドイツ留学, [Tome 2 Devenir père](#) (2011)はリトアニアでの field work とパリ時代を扱う。30 歳代半ばに Genève に戻って以後は第 3 巻以後に扱われる予定である。John E. Joseph, [Saussure](#), Oxford (2012)は 800 ページ近くの 1 巻本。Claudia Mejía Quijano, [Ferdinand de Saussure. Une vie en lettres 1873-1913](#) (2014)は、現在知られている限りのすべての書簡を収録し、Karl Brugmann らに宛てたドイツ語のものには仏訳を付している。

CLG の各国語への翻訳については枚挙にいとまがないが、特に重要なのは、第 3 講義の Constantin のノートの英訳者でもある Roy Harris によるもの<sup>15</sup>である。Wade Baskin による最初の英訳 (1959)<sup>16</sup> が、英語圏では CLG や、その「思想」を言語学を超えて発展させた「構造主義」についてまだ一般的に知られていなかった時代を反映して、ある程度読みやすさを犠牲にした直訳調を特徴とするのに対して、Harris のものはよりこなれた・読みやすいテキスト<sup>17</sup>といえる。ただ、Saussure 特有の術語の多くが、日本語圏では既にフランス語の形のままでよく知られているようになっているため、それを英語で置き換えることは、かえって理解を困難にする恐れがある。

<sup>12</sup> Ludwig Jäger et al., “Notes sur l’accentuation lithuanienne”, (Cahier de) [L’Herne. Saussure](#), 2003, 323-350. Saussure’s Law の名でも知られているリトアニア語のアクセント規則の研究については、Daniel Petit, Claudia Mejía Quijano, “Du nouveau à propos du voyage de F. de Saussure en Lituanie”, *CFS* 61, 2008, 133-157; John E. Joseph, “[Why Lithuanian Accentuation Mattered to Saussure](#)”, *Language and History* 52, 2009, 182-198; Daniel Petit, “[New insights on Lithuanian accentuation from the unpublished manuscripts of Ferdinand de Saussure \(1857-1913\)](#)”, *Baltic Linguistics* 1, 2010, 143-166.

<sup>13</sup> *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*, Leipzig 1879 [1878]. 下記 *Recueil* 1-268 に初版と異なるページ(対照表付き)で再版。その後 Hildesheim 1968 で初版の写真版が再版。また [CUP 2009](#) でも再版。初版の pdf は [Internet Archive](#) で容易に入手できる。なお 1968 年の reprint までは *Recueil* から引用されることが常識だったので、そのことに無知であると当該ページに引用された議論が見つからないと不満を述べることになる(月刊『言語』1999.2, 87 頁参照)。

<sup>14</sup> Saussure の没後出版された著作集 Charles Bally et Léopold Gautier, [Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure](#), Genève 1922 (repr. Genève 1970) (以下 *Recueil*)に収録された(539-541)わずか 3 ページの、Johannes Schmidt, *Kritik der Sonantentheorie*, Weimar 1895 の書評(*Indogermanische Forschungen* VII. *Anzeiger* 1897, 216-219)を準備するための下書きメモが、Ferdinand de Saussure, [Théorie des Sonantes. Il manoscritto de Ginevra BPU Ms. fr. 3955/I](#), edizione a cura di Maria Pia Marchese, Padova 2002 で 125 ページにわたって出版されている。

<sup>15</sup> [Course in General Linguistics](#), London 1998 (repr. with a new introduction 2013).

<sup>16</sup> [Course in General Linguistics](#), New York 1959.

<sup>17</sup> フランス語の idiom を英語の idiom で置き換えることが時に批判の対象にもなる。Harris 訳の評価については Carol Sanders, “Saussure translated”, *Historiographica Linguistica* 27/2-3, 2000, 345-358; John E. Joseph, “Harris’s Saussure — Harris as Saussure: the translations of the Cours and the third course”, *Language Sciences* 33, 2011, 524-530 を参照。

以下に批判的なコメントを掲げる町田健による新訳は、その点「ランゲージュ・ラング・パロール・シニフィアン・シニフィエ」<sup>18</sup>をあえて訳さないという画期的な方針をとっており、その点に限って言えば成功していると思われる。ただ、CLG 原文の理解や事実関係について、Harris 訳を参照していれば多くの間違いを免れていたであろうと惜しまれる。

Engler の *édition critique* に加えて、それぞれの講義の代表的な学生のノート、Sechehaye による第3講義の(Constantin を除く)学生ノートの collation、Saussure 自身のメモの断片などの出版によって、いわば Platon を通さずに Socrates の言葉を垣間見る機会が与えられることになったが、もちろん3回の講義の全体を再現するには及ばず、まして Saussure 自身が書物として出版したらどうなっていたか、は永遠に手の届かない問題である。ということは依然として Saussure 理解は書物としての CLG から出発しなければならない、ということだが、新資料を考慮すると、場合によっては編者がどう手を入れていたかがわかるため、CLG の記述の理解がより確実になる、ということが期待される。

町田訳は日本語としての読みやすさという点では、場所によってかなり不均衡な印象を与える。そのような場合、以下で触れるように翻訳自体が不適切であるか、あるいは過度に逐語訳であることがある。一例として：

[126] Il est vrai que les valeurs dépendent **aussi et surtout** d'une convention immuable, la règle du jeu,

(128) 確かに、価値は**また、そしてとりわけ**、不変の慣習、つまり競技の規則によって決定され

「主の言葉」を一字一句ゆるがせにしないで翻訳することが前提であった [Mesrop](#), [Wulfila](#), [Kyrillos and Methodios](#) とは異なり、**aussi et surtout** をそのまま「また・そして・とりわけ」と逐語的に写すことにどんなメリットがあるのか疑問である。

typo はかなりの数に上る。以下で指摘するものはおそらくは比較的目的のもので、より注意深く見ればさらに数が増えるものと思われる。各項目の冒頭にあげた( )内の数字は町田訳のページ数、[ ]内は1922年の再版を写真複製した Tulio de Mauro による [CLG の註釈版](#)(1972; 以後再版多数)のページ数である。

<sup>18</sup> Harris 訳はそれぞれ language (*langage*), linguistic structure (*langue*) ないし languages (*langues*), speech (*parole*), signification (*signifiant*), signal (*signifié*).

(iv) *Mémoire* (1878)<sup>19</sup>が「喉音」(laryngeals)を想定したという通説は、概説書などでかなり広まっているが、実際はここで想定された *coefficients sonantiques* は「音節形成を行いうる(半)母音的なもの」である。これが後の学者の手によって摩擦音的な子音に発展させられていく過程は、O. Szemerényi, “[La théorie des laryngales de Saussure à Kuryłowicz et à Benveniste. Essai de réévaluation](#)”, *BSL* 68, 1973, 1-25 (= *Scripta Minora I*, Innsbruck 1991, 191-215)に詳しく扱われている。

(2) [8] *secrétaire* は「秘書」ではなく「書き物机」。Baskin 訳の *secretary* にも同じ意味がある。Harris は“in his desk drawers”としている。

(8) [13] 1777 年という「ありえない年」については、de Mauro 註 23 参照。

(8) (註 7) Τέχνη。

(10) (註 12) *devanāgarī* をここでの方式で仮名にすれば「デーバナーガリー」。この文字は、今は *Sanskrit* の印刷に主として用いられていることは事実だが、歴史的には比較的新しいものである(『言語学大辞典・世界の文字編』参照)。「語末の-s が *external sandhi* で-h になる」というのは正確ではなく、絶対語末(pause の前)か次の語の語頭が特定の(labial か *velar*; *sibilant* の場合はそれに同化することも許される)無声子音である場合にそうなり、語末でも次の語の語頭がそれ以外の子音の場合は異なるので、この表現では誤解を与える可能性がある。また h で表記される *visarjanīya* (通称 *visarga*) が *voiceless velar fricative* だというのは根拠がない。おそらく後者に相当する *jihvāmūliya* (舌根音)には別の記号が用いられる(J. Wackernagel, [Altindische Grammatik I](#), 260)。

(10) [15] (註 14) ここでいう *radical* は、単語の形から活用語尾(この例では格語尾)を除いた部分を指している。*Sanskrit* では格語尾が明確に同定できるので、結果として *stem* もどのような形かはつきりすることになる。*racine* についてはここでは触れていないが、*stem* からそれを形成する接辞を除いたものということになる。接辞は名詞の *stem* を形成するものと動詞の *stem* を形成するものがあり、*Sanskrit* ではこれも明示的に示すことが出来る(インドの土着の文法家が既に示している)ために、そ

<sup>19</sup> *CFS* 32, 1978 がこの書物の 100 周年記念号として特集を行っている。注目すべきは J. Kuryłowicz, “Lecture du «Mémoire» en 1978: un commentaire”, 7-26; C. Watkins, “Remarques sur la méthode de Ferdinand de Saussure comparatiste”, 59-69 (= *Selected Writings I*, Innsbruck 1994, 264-274)。また以下も参照: Manfred Mayrhofer, *Nach Hundert Jahren*, Heidelberg 1981 (rev. 風間喜代三『言語研究』83, 1983, 106-112); Remo Gmür, [Das Schicksal von F. de Saussures "Mémoire": eine Rezeptionsgeschichte](#), Bern 1986; Konrad Koerner, “The importance of Saussure’s ‘Mémoire’ in the development of historical linguistics”, *Festschrift for Henry Hoenigswald*, Tübingen 1987, 201-217; Anna Morpurgo Davies, “[Saussure and Indo-European Linguistics](#)”, in Carol Sanders ed. *The Cambridge Companion to Saussure*, CUP 2004, 9-29 は特に重要。

れと比較することによってギリシア語やラテン語の語形の構成原理を明らかにすることが出来るようになったといえる。下記(234) [229]の記述も参照。

(11) [16] Curtius はドイツ語の発音としては「クルツィウス」。

(11) [16] “mais ce n’est pas par excès de conscience qu’il a péché”. Engler (p. 8, no. 47)によると第2講義の二人の学生がこのことばを記録しているので、Saussure 自身が使った表現(litotes?)と思われる。Whitney による批判の根拠として挙げられているので、「厳密さにおいて多少欠けるところが無しとしない」というような意味か。

(13) [17] 本文の誤植を訂正した(ã → ä; なお de Mauro 版の reprint では ā と ä の違いがほとんど判別できない)のはよかったが<sup>20</sup>、ここで Saussure が批判しているのは、母音の交替現象があたかも階段(あるいははしご段)のステップを上がったり下がったりするようなものだ、とする考え方なので、(註 24)で「階梯」(日本語の訳語として定着しているが)を紹介するだけでは、かえって Saussure の意図を曖昧にするといわざるをえない。なお Sanskrit の発音を IPA 表記するなら ä はより closed (saṃvṛta)の[ə]ないし[ʌ]であって[a]ではない<sup>21</sup>。

(15) (註 34) この時代の「古ブルガリア語」は、今でいう「古代教会スラヴ語(Altkirchenslavisch, Old Church Slav(on)ic)」のことだと付け加える必要がある。

(21) [24] redoutable これは訳しにくい語だが、CLG は Riedlinger の第2講義のノートをかなり刈り込んでいるので、文脈がわかりにくくなっていることが一つの原因かと思われる(Komatsu/Wolf 1997, 2; Engler no. 138, p. 27)。またノートの de nouveau を nouvelle という形容詞に変えてしまっている。流れとしては、まず、発音器官による音の生成と聴覚による受容によって形成されるイメージの対応があり、さらに(de nouveau)、もっと「手強い」(redoutable)対応として、このイメージと意味の結びつきがある、ということ。Harris は意味を取って “Here another complementarity emerges, and one of great importance”としている。直訳ではどうにもならないのでやむを得ない意識といえる。

(23) [25] “la langue seule ... fournit un point d’appui pour l’esprit” 確かに l’esprit は「精神(作用)」だが、哲学などの context の外では、日本語で日常的に「精神」というとむしろ「根性」のような意味での限られた用法を連想する。むしろここでは「ラングだけが ... (ランガージュについて)考えるためのしっかりした足がかりを与えてくれるのだ」とした方がはっきりする。Harris 訳 “provides something our minds can satisfactorily grasp”参照。

<sup>20</sup> Arbre d’Or の CLG [電子テキスト版](#)(p. 10)は、“comme il voit dans le ā du sanscrit un renforcement de ā”と意味不明の間違いを犯している。

<sup>21</sup> Altindische Grammatik I, 3.

(27) [27] “il n’est donc pas chimérique de dire que c’est la langue qui fait l’unité du langage” 「ランゲージュをひとまとまりのものとする(に一体性を与える)のはラングだ、と言うことは現実離れた妄想ではない」。(仏)unité は(英)unit と unity の両方に対応することに注意。Harris 訳 “... which gives language what unity it has”。したがって(註 58)は的外れと言うべき。

(31) [30] “La langue n’est pas une fonction du sujet parlant, elle est le produit que l’individu enregistre passivement” : “fonction”という語は、講義ノートではすべて“une fonction naturelle de langage”として用いられている(Engler no. 244, p. 41; Harris/Komatsu 1993, 69; *Collation Sechehaye* (2015) 272 )のに、ここでは CLG の編者が別な表現にしている。CLG の翻訳としては、「ラングは話し手の(能動的な)機能ではなく、既にできあがったものとして個々人が受動的に記録するものだ」。

(32) [31] (註 77) 現代の言語学で使う *discourse* の意味をここに求めるのは時代錯誤である。(独)Rede の訳語として、というのだから「(ひとまとまりの)話し、スピーチ、演説」でいい。

(38) [36] “les appareils électriques” この時代に「電子機器」は存在しない。→「電気機器」

(45) [42] (註 107) Zend (正しくは Zand)はゾロアスター教の聖典 *Avesta* の写本で、*Avesta* 語のパッセージに対してつけられた中期ペルシア語(Pahlavi 語)によるバラフレーズと注釈の部分を目指す。西洋のイラン学者が当初からこの注釈部分の名称を聖典の言語名と誤解した事情については Wikipedia の [Zend](#) の項がほぼ正確に伝えている。この名称はドイツ語圏では代表的なイラン学者 [Christian Bartholomae](#) などの活躍によって 19 世紀末から使われなくなったが、フランス語圏ではその影響が多少遅れて伝わり、第 1 次大戦頃からはほぼ見られなくなった。Saussure の晩年はこの用法のほぼ最後の時期に当たる。1903 年に出版された Meillet, [Introduction 初版](#)(1903)では、p. 429 (Errata à p. 37)で“C’est à cette langue que l’on donne en français le nom impropre, mais commode et usuel, de *zend*”としているが、本文中では言語名の略号 *zd* が使われている(後の版では *av* に改められた)。

(45) [42] スラブ祖語 → 古代(教会)スラブ語。(註 108)は間違いで、*le paléo-slave* が Old Church Slav(on)ic として 9 世紀後半から記録されている言語を指すことは、*Mémoire* や *Recueil* 404 の用法などから明らかである。なお授業では *paléoslave* ou *slave ecclésiastique* とはつきり言っている(Engler no. 409, p. 63)。下記(300) (註 498)へのコメントも参照。

(45) [43] “La meilleure preuve en est que ...” 「このことをもっともよく証明するのは ... という事実である」。

(46) (註 110) Sanskrit の *catuṛ-aṅga* (catuṛ-「4 つの」+aṅga-「member」を持つ)は、象兵・騎兵・馬車(戦車兵)・歩兵からなる軍隊を表し、このような要素からなるボードゲームの名にもなった ([Böhrtlingk-Roth II 927-8](#))<sup>22</sup>。仮名で表記すれば「チャトゥランガ」。フランス語読みしても仕方ない。

(48) [45] (註 113) 本文で「紀元前 3 世紀」といっているので、「紀元前 2 世紀以来」はまずい。実際には紀元前 7 世紀から Archaic Latin の文字資料が残っている。

(49) [46] \*daupyan は明らかに \*dauþyan の誤植。第 1 講義の Riedlinger のノート(Komatsu/Wolf 1996, 5; Engler no. 457, p. 69)によれば、Saussure は「-y-のある形と無い形の違いだ」とは言っているが実際に CLG に印刷された形を示してはいない。そうすると編者が作った形である可能性がある。第 2 子音が labial というのはあり得ない形で、当然 dental の無声摩擦音である。CLG はあたかもゲルマン祖語の形のように\*をつけているが、この動詞はゴート語で記録されている(preverb のない形と af-, ga-が付いた形で、いずれも tōten の意味で)。W. Streitberg, [Gotisch-Griechisch-Deutsches Wörterbuch](#) (1910) s.v. dauþjan.

(52) [49] 15 世紀 → 19 世紀 (フランス革命時はまだ過渡期だった)。65 ページ以下も参照。

(註 125) 上海語(呉語)、広東語(粵語)、福建語(閩語)、客家語、湘語などは Sinitic ではあるが、「中国語の方言」とは言えない。北京語(北方官話ないし普通語)とひとつのラングを構成するとは言えないだろう。

(55) [51] (註 134) ここでは長母音と短母音の対立が問題なのだから、長母音の末尾に(すべてではない)多くの方言で i-glide が現れるということは重要ではない。IPA がまだ現在のような形では存在しない時代の書物の記述に、IPA を前提にした批判をすることは無意味に思われる。

(55) [51] (註 135) Carl Darling Buck, *Greek Dialects* の出版年は 1955 年である (1910 年の *Introduction to the Study of the Greek Dialects* の改訂増補版で、Buck の死の数週間後に出版された; G. S. Lane, *obit.*, *Language* 31/2, 1955, 182)。CLG で paizō, paizdō, paiddō と印刷されている形は、Riedlinger のノートによれば、παίσδω (παίζδω ではない)、παίζω, παίδδω (この順で) (Engler no. 568, p. 85; Komatsu/Wolf 1996, 11)である。Buck 71 によれば-ζ- と-σδ-は文字の上では違うが同じ発音を表していることになる。-δδ-の形は Aristophanes の *Lysistrata* の Laconian (Doric の一部)方言の パッセージ(1313)に現れる(Bechtel, *Gr. Dialekte* II<sup>2</sup>, 1963, 323)<sup>23</sup>。

(<http://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Perseus%3Atext%3A1999.01.0035%3Acard%3D1295>)

<sup>22</sup> *Sanskrit-Wörterbuch* herausgegeben von der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, bearb. von Otto Böhrtlingk und Rudolph Roth, Bd. 2, 1858.

<sup>23</sup> Friedrich Bechtel, *Die westgriechischen Dialekte*, Berlin 1963<sup>2</sup>.

Lesbian で Attic の  $\zeta$ -に相当するところに  $-\sigma\delta$ -が現れるのは事実だが(Bechtel, 1963, 34)<sup>24</sup>、 $\pi\alpha\iota\sigma\delta\omega$  の形( $\pi\alpha\iota\sigma\delta\epsilon$  という形で)が実際に現れるのは、Doric で書いた前 3 世紀の詩人 Theocritus (15.42) である。

<http://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Perseus:abo:tlg.0005.001:15>

(58) [53] (註 144) 小文字(minuscule)が用いられるようになったのは、カロリング朝、特に Charlemagne の時代(8 世紀後半)以降だから、この註は無意味である。

(59) [54] (註 147) de Mauro も引用のソースを見いだせなかったようだが、イラン学者の James よりも兄のフランス語史学者 Arsène (1846-1888)の可能性の方が高い。たとえば Adolphe Hatzfeld, Arsène Darmesteter, Antoine Thomas, *Dictionnaire général de la langue française du commencement du XVIIe siècle à nos jours*, 2 vols., 1895-1900 の“vingt”の項が参照する序論の言語史 § 502 (I, 167) は、ラテン語の語源を理由に失われた子音を綴りの上で復活させた語形に触れて“Ces modifications, en général, n’ont pas altéré la prononciation du mot, bien que, de nos jours, l’on puisse constater une tendance à prononcer les doubles consonnes. Mais parfois ce retour à l’étymologie a altéré profondément la prononciation: ainsi dans *abstenir* pour *asténir*, *adjoindre* pour *ajoinde*, *expert* pour *espert*, *frémir* pour *fremir*, etc.”という。

(60) [55] この章および次章(p. 68 以下)で扱われることについて、phonologie を「音韻論」、phonème を「音素」と訳すことはきわめて危険である。現代の言語学は、基本的に Prague 学派と構造主義言語学以後の、機能的(弁別的)単位としての音素(phoneme)とその研究である音韻論(phonology)の概念を前提にしているが、そのような概念が確立される以前に、Saussure が CLG において同じ用語を用いて扱っていることは、現代の言語学では調音音声学と、個々の言語のシステムを離れた、物理的存在としての「言語音」に相当するものである。“phonologie”をこのような意味で使わざるを得なかった理由は、p. 60-61 にあるように“phonétique”がこの時代には既に「歴史音韻論」の意味で使われていたためだが、現代の読者にとって、説明抜きにこのような翻訳を提供することは、誤解と混乱の原因でしかない。Harris の“physiological phonetics”と“speech sound”という訳は、その点、至極まっとうであると言える。de Mauro の註 103 も参照。

(61) [56] phonétique は「歴史音声学」というよりはむしろ「歴史音韻論」で、phonologie が「調音音声学」に相当する。

(61) [56] “un système de phonologie” も従って「音韻体系」ではなく、「言語音の体系・組織」である。以下で繰り返し現れるこの表現(système phonologique も同様に)について、現代の言語学での理解とは異なることをその都度はっきりさせる必要がある。

<sup>24</sup> *id.*, *Der lesbische, thessalische, böotische, arkadische und kyprische Dialekt*, Berlin 1963<sup>2</sup>.

(62)[58] “témoignage de l’écriture” 「文字表記による証言」

(63) [59] (註 154) *tenuis* <細い>

(63) [59] (註 155)  $\psi\lambda\acute{o}\varsigma$  <なめらかな、飾りのない>; W. S. Allen, *Vox Graeca* 12 (14<sup>3</sup>) “smooth, plain”<sup>25</sup> ( $\psi\lambda\acute{o}\varsigma$  はもともと「裸の、毛や羽を失った(動物)、重装備していない(兵士)」という意味 (LSJ<sup>26</sup>))。

(64) [59] (註 156) フランス語圏では比較的最近まで通常の転写の  $\acute{s}$  に対して  $\acute{c}$  を用いていた。Stchoupak, Nitti, Renou, *Dictionnaire Sanskrit-Français*<sup>27</sup> 1972<sup>3</sup>, Renou, *Grammaire Sanscrite*<sup>28</sup> 1961<sup>2</sup> など。これはもちろんタイプライターにこのキーが備わっていたためである。起源と sandhi における振る舞いを考慮すれば何らかの palatal の sibilant であったことは確実だが、それ以上精密に音価を決定することはできない。*ich-Laut* [ $\acute{c}$ ]も可能性の内だが、それ以上のことは言えない。*Altindische Grammatik* I 226 参照。

(65) [60] (註 159) OHG で(ラテン語からの借用を除けば)c の文字が *sc* (= NHG *sch*)や *ch* のような組み合わせではなく、単独で母音の前で用いられることは比較的稀だが、前舌母音(i, e)の前で *z* の variant spelling として dental affricate を表す(それ以外の場合は *k* の variant spelling)用例は見られる。例えば Schützeichel, *Althochd. Wörterbuch*<sup>29</sup> の *zīt* (NHG *Zeit*)の項には *cīt*, *ciit*, *cýt* などの綴りが記録されている。Saussure が引く例は、「存在しない綴り字」だからその音価を問題にしても仕方ないが、「後の時代に *wacer* のような綴りが見いだされる」ということは、この単語の medial consonant が fricative から affricate へと変化した発音を反映しているのか、それとも文字 *z* と *c* の部分的な混同に影響された書き間違いなのか、判断するのは困難である。

(65) [60] (註 160) Classic の時代に  $\eta$  がより広い母音[e:]を表し、より狭い[e:]は  $\epsilon\iota$  と表記されていたことは確実である。*Vox Graeca* 66ff. (69<sup>3</sup>ff.)参照。Pre-classic の時代には広い[o:]を表す  $\omega$  と狭い[o:]を表す  $ou$  の区別があったことも知られているが、後者が[u:]へと raise されて、古典時代には2種類の[o:]の区別は失われた。*Vox Graeca* 72 ff.(75<sup>3</sup>ff.)参照。

(72) [67] “se ferme par leur resserrement” 「(声帯が)引き締められると(声門は)閉じる」。

<sup>25</sup> W. Sidney Allen, *Vox Graeca*, CUP 1968 (1987<sup>3</sup>).

<sup>26</sup> H. G. Liddel, R. Scott, H. S. Jones, *A Greek-English Lexicon, with a Revised Supplement*, OUP 1996.

<sup>27</sup> N. Stchoupak, L. Nitti, L. Renou, *Dictionnaire sanskrit-français*, Paris 1932 (1972<sup>3</sup>).

<sup>28</sup> Louis Renou, *Grammaire Sanscrite*, Paris 1930 (tome I et II réunis avec Addenda 1961).

<sup>29</sup> Rudolf Schützeichel, *Althochdeutsches Wörterbuch*, Tübingen 1969 (Berlin 2012<sup>7</sup>).

(75) [71] “ə ou e muet” 「schwa ə または(通称)無音の e (と呼ばれるもの)」。この二つは同一の音を指す。muet というのは文字 e で書かれていても発音されない(ことがある)ことによる俗称。ただし、子音連続の環境によって、または話し方の register によって、発音されることがあるのは周知の通り(朝倉文法事典<sup>30</sup>の「e caduc」の項参照)。IPA の[e]に「無声」を表す“circle below” (しかも右にずれている)をつける、というのは正当化できない。p. 97 の(註 196)は正しく説明している。p. 125 以下の記述も参照。

(75) [72] (註 173) インドヨーロッパ祖語における palatal と velar の対立は、特に後者が labial の要素を持つことを特徴とする。つまり palatal *kʲ* と labio-velar *kʷ* の対立である。Saussure が意図していたのもこの 2 系列であるはず (彼の表記では *k*<sub>1</sub> と *k*<sub>2</sub>)。この主要な 2 項の対立に加えて、両者の中間的な位置を調音点とする pure velar *k* の系列を想定することが最近では主流になりつつあるが、主要な対立はあくまでも最初の 2 つの系列である。またここでロシア語などスラヴ語の例を出すことは、スラヴ語における palatal/non-palatal の対立が祖語の上記の 2 系列を引き継いでいるかのような誤った印象を与えかねないので、不適切と言うべきである。

(76) [72] 表の p のコラムの最下段 [ ] は当然 [ ] の誤植。同様に:

(79) [75] 上表の l のコラムの最下段 [ ] も [ ] の誤植。

(81) [77] “Or ce n’est pas cela qui nous est donné d’abord; la syllabe s’offre plus directement que les sons qui la composent” 「ところが我々が直接観察できるのは、まず音節であって、それを構成する個々の音ではない」。

(81) [77] “ce n’est jamais une unité simple qui embarrasse en linguistique : si, ... il n’en résulte rien” 「言語学においてやっかいなのは、単純な単位なのではない。... という(変化)が起きたとしても、それ自体は特に大した問題ではない」。

(81) [78] “le fait seul qu’il y a deux éléments entraîne un rapport et une règle, ce qui est très différent d’une constatation” 「二つの要素があれば、それだけで(互いの)関係やそれぞれの出現に関する規則が問題となる。これは(単に二つの要素があるという事実の)確認とは全く違ったことである」。

(82) [78] “Il est bien claire qu’ils se compose d’une occlusive qui ...” 「(どちらの場合も音連続に)閉鎖音が含まれているということはすぐに見て取れるが、それがある場合は ...」。

(83) [80] CLG にはない IPA 表記の [ ] を用いているために混乱がある。「a を除く母音まで(aóóa)」

<sup>30</sup> 朝倉季雄『フランス文法事典』1955(朝倉季雄, 木下光一『新フランス文法事典』2002)。

とするか、CLG のように *italic* で「*a* を除く母音まで(*aóóá*)」とするかどちらかにする必要がある。IPA [a]は当然[a]とは別の音である。

(83) [79] (註 185) Saussure にとって *sonantes* とは *Mémoire* 以来 *i, u, r, l, n, m* の(母音的な形態と子音的な形態の両面を持つ) 6 つの音を意味している。4 つだけということは決してない。

(86) [83] Skt. *krta-* (= *kr̥tá-*) 「行われた、作られた」(*kr̥tá-*だったら「購入された」だが、別の動詞 *kr̥ī-*)。PIE *ymto-* (= *\*ym̥tó-*) 「抑制された」

(89) [87] 下から 7 行目と 3 行目: いずれも *particulièrement*

(91) [88] (註 189)は p. 15 の(註 32)と統一すべき。

(92) [89] 「*il cria* <彼は叫んだ>における *i-a*、*ébahi* <たまげた>における *a-i*」

(93) [91] *auwa* [auwa]

(95) [93] (註 193) 「息子」の語で、NSg.が接尾辞部分(*-nu-*)を *full grade* にする例は *attest* されない。Wodtko et al., *Nomina im indogermanischen Lexikon*<sup>31</sup>, 686ff.参照。この語の *paradigm* 全体については、例えば Sihler, *New Comparative Grammar*<sup>32</sup> 1995, 321f.参照。CLG であげられた形(*sūneu*)は *Vocative singular* に相当する(Sihler はゴート語の *-au* 形を基に *o-grade* とする)。

(96) [94] 3 行目: *meurtrier*

(100) [97] 有名なこの図の *caption* は、CLG では *ARBOR EQUOS* だが、学生ノートでは *arbos equus* (Engler no. 1087, p. 147; Harris/Komatsu 1993, 74)である。この翻訳ではそのどちらでもないものになっている。

(104) [101] “*un char, par exemple*” 「たとえば馬車」 (Harris “*chariot*”): 「戦車」の意味で *char* が用いられるようになったのは第 1 次世界大戦からで、「講義」が行われたしばらく後からである。学生のノートでは(Engler no. 1138, p. 155; *Collation Sechehaye* 303)、*Mme Sechehaye* と *Joseph* が“*une voiture*”と記録している。これを *un char* にしたのは CLG の編者であろう。

(105) [102] *fāgus pīpiō* CLG で印刷されている *macron* は正確に複製すべきだろう。

<sup>31</sup> Dagmar S. Wodtko, Britta Irslinger, Carolin Schneider, *Nomina im indogermanischen Lexikon*, Heidelberg 2008.

<sup>32</sup> Andrew L. Sihler, *New Comparative Grammar of Greek and Latin*, OUP 1995.

同様に aie!。

(108) [105] (註 212) 現生人類(homo sapiens sapiens)が「アフリカの東部で誕生した」ということは大方の認めるところだが、人類の言語がそれと同時に誕生したかどうか、あるいはその後のいずれかの段階で形成されたかは、全く推測の手がかりさえない問題である。

(112) [109] “le lien de l’idée et du signe s’est relâché” : de Mauro の註 155 にあるように、この箇所では(他にも何カ所かで)本来 *signifiant* ないしは *image acoustique* であるべきものが *signe* と表現されている。Engler no. 1252, p. 166, Harris/Komatsu 1993, 98; *Collation Sechehaye* 324 参照。第3講義の後半で新しい *technical term* が作られつつあって未だ固定していない状況を反映しているものと思われる。

(112) [109] (註 217) *Vulgar Latin* の個々の単語の発音を IPA 表記することは実際問題として不可能である。むしろ、古典ラテン語の母音体系と *VLat* の推定される母音体系を対比して、どこが変わってどこが変わっていないのか(母音の長短の対立の喪失、e と o で狭母音と広母音の分化)を示すべきだろう。

(112) [109] (註 218) *drit* <3 番目の> = <3 分の 1>

(113) [110] (註 221) 「古英語」すなわち *CLG* でいう *anglo-saxon* では、「足」の単数形は *fōt* だが、複数形は *fēt* であって、*fōti* ではない。したがって「古英語の *fōti*」というのは誤り。この形は学生のノートでは *préhistorique anglo-saxon* (Engler no. 1257; p. 167, Harris/Komatsu 1993, 99; *Collation Sechehaye* 325)と呼ばれ、*CLG* では *la forme pré littéraire* とされたもの (Don Ringe et al., [The Development of Old English](#)<sup>33</sup>, 117 で *Proto-West-Germanic* と呼ばれるものに相当する)。

(121) [119] *crêpé* 「(髪が)カールした、巻き毛の」 (*Oxford Lat. Dict.*<sup>34</sup> “curly-haired”)

(121) [119] *décrepitus* : Ernout-Meillet, *Dict. étym.*<sup>35</sup>, 1959<sup>4</sup>, 167, 818 参照。

(121) [119] “Pour qu’il se produise, le concours de certains phénomènes d’évolution a été nécessaire” 「このような事態が生じるためには、いくつかの言語進化の出来事が同時進行することが必要だった」 (Harris : “But in order to bring it about, certain evolutionary changes had to coincide”).

<sup>33</sup> Don Ringe and Ann Taylor, *The Development of Old English (A Linguistic History of English Volume II)*, OUP 2014.

<sup>34</sup> P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary*, OUP 1983.

<sup>35</sup> A. Ernout et A. Meillet. *Dictionnaire étymologique de la langue latine : Histoire des mots*. 4e éd. 1959.

(122) [120] (註 232) ここでの問題は i-umlaut なので、『言語学大辞典・術語編』を引いて u-umlaut を持ち出す必要はない (ON と OE で限定的に起こる現象で i-umlaut ほどの一般性はない)。なお i-umlaut は比較的新しい変化なので、ゴート語がそれを示さないのは、地域的な要因の他に時期的な理由も考慮する必要がある。なお索引(325 ページ)では誤って「ラ行」に入っている。

(122) [120] (註 233) *Wald* の複数形は *Wälder*。 *Wälde* ではない。

(122) [120] 複数形 \*gōsi (\*必要)。

(126) [123] スラブ祖語 → 古代教会スラブ語 (上記 p. 45 へのコメント参照)。(註 239, 240) も同様。なおここで古代教会スラヴ語の転写に Cyrillic の ъ と ѣ を用いるのは一つの方法で、ロシア語などとの混同・誤解を避けるためそれぞれ ŭ と i で転写する方法も同じくらい一般的に用いられている(たとえば Meillet, *Introduction* は 1903 年の初版以来こちらの方法)。いうまでもなく、キリル文字は元々古代教会スラヴ語を表すために発明されたもので、こちらの方が本来の用法であり、ロシア語の用法は、表すべき音がなくなった文字を転用したもの。

(126) [123] インド・ヨーロッパ語 → インド・ヨーロッパ祖語

(128) [126] “Cette règle admise pour une fois pour toutes” 「ひとたび(かつて)定められてしまったこの規則」 (Harris : “These rules, fixed once and for all, ...”).

(129) [127] “les changements qui interviennent entre les états n’y ont eux-mêmes aucune place” 「(二つの)状態の間で起きた変化は、それ自身はどちらの状態にも属さない」 (Harris : “The change which has taken place belongs to neither”).

(129) [127] “Car, si des faits diachroniques sont irréductibles au système synchronique qu’ils conditionnent, lorsque la volonté préside à un changement de ce genre, à plus forte raison le sont-ils lorsqu’ils mettent une force aveugle aux prises avec l’organisation d’un système de signes” 「なぜならば、この種の変化が意図的に行われる場合にさえ、通時的な諸事実(変化)は、その(変化によって)影響を与える(対象である)共時的な体系とは別物であるのだから、(実際の多くの場合そうであるように、変化の)盲目的な力が記号の体系という(共時的な)組織に攻撃を加えるような場合はさらにいっそう(通時態と共時態は別物である)といえる」。 (Harris : “For if diachronic facts cannot be reduced to the synchronic system they affect, even when a change of this kind is made deliberately, this will be the case even less when blind forces of change disturb the organisation of a system of signs”).

(132) [130] θῦμός (-τ ではない!)。なお PIE の形に  $h_2$  を認めるかどうか(それとも

unspecified H とするか)は、Hittite のいくつかの語形との語源的つながりを認めるかどうかにかかっている。Puhvel, *Hitt. Etym. Dict.*<sup>36</sup> I 82, de Vaan, *Etym. Dict. Lat.*<sup>37</sup>, 249, Kloekhorst, *Etym. Dict. Hittite*<sup>38</sup> 189 参照。Beekes, *Etym. Dict. Greek*<sup>39</sup> 564 および Tischler I<sup>40</sup> 36-7 はこの語源的関係に触れない。

(132) [130]                   ἐπτά (spiritus asper!)

(132) [130]                   ζυγόν (-v ではない!)

(132) [130]                   (註 245) 冒頭の(iv)へのコメントで指摘したように、ソシュールが想定したのは「喉音」ではない。より母音的な *coefficients sonantiques* を想定することによる困難は、特にこの要素が子音に続き、他の *sonant* と別の子音の間に現れる場合(現代の表記では C<sub>1</sub>RHC<sub>2</sub>)に発生する (*Mémoire* 248f.)。この位置で「母音化」して音節を担うのは実際は *coefficient sonantique* ではなく他の *sonant* の方である<sup>41</sup>。「喉音理論」なるものは、CLG 出版時点では存在しなかったのだから、「仮説に過ぎなかった」ということすらできない。

(135) [132]                   \*medhu → méthu (μέθυ)では意味が変わっている。PIE 形は「蜂蜜・蜜酒 (mead)」を意味し、ギリシア語形は「葡萄酒」である(Chantraine, *Dict. étym.*<sup>42</sup> III 676)。

(135) [132-3]               h<sub>2</sub>enǵhoh<sub>2</sub> \*septŋ                   oũç                   θριζί

なおこの最後の θρικ-/τριχ-の交替を示す「髪の毛」の語は、帯気音の異化を示す Grassmann の法則<sup>43</sup>の美しい例だが、Grassmann 自身の論文には現れず、Gustav Meyer, *Griechische Grammatik (Bibliothek indogermanischer Grammatiken, Bd. 3), 2. Aufl. Leipzig 1886*, 291 でこの種の交替の例として挙げられた (同書 *1. Aufl. 1880*, 257 ではまだ用いられていないが、*3. Aufl. 1896*, 389 では引き続き用いられている)。その後標準的なギリシア語文法では Brugmann の *Griechische Grammatik*<sup>44</sup>, 1900<sup>3</sup>, 104, Schwyzer, *Griechische Grammatik Bd. 1*<sup>45</sup>, 261 へと引き継がれた。歴史言語学では CLG

<sup>36</sup> Jaan Puhvel, *Hittite Etymological Dictionary, Vol. 1 Words beginning with A, Vol. 2 Words beginning with E and I*, Berlin 1984.

<sup>37</sup> Michiel de Vaan, *Etymological Dictionary of Latin and the Other Italic Languages*, Leiden 2008.

<sup>38</sup> Alwin Kloekhorst, *Etymological Dictionary of the Hittite Inherited Lexicon*, Leiden 2007.

<sup>39</sup> Robert S. P. Beekes, *Etymological Dictionary of Greek, 2 Vols.*, Leiden 2009.

<sup>40</sup> Johann Tischler, *Hethitisches Etymologisches Glossar, Teil 1, a - k*, Innsbruck 1983.

<sup>41</sup> Albert Cuny の指摘。Szemerényi, *op. cit.* (上記 p. iv へのコメント) 13.

<sup>42</sup> Pierre Chantraine, *Dictionnaire Etymologique de La Langue Grecque: Histoire Des Mots*, tome 3, Paris 1974.

<sup>43</sup> Hermann Grassmann, “Ueber die aspiraten und ihr gleichzeitiges vorhandensein im an- und auslaute der wurzeln”, *Zeitschr. für Vergleichende Sprachforschung (= KZ)*, 12/2, 1863, 81-138; W. P. Lehmann, *A Reader in Nineteenth Century Historical Indo-European Linguistics*, Bloomington 1967, 109-139 に英語による要約。

<sup>44</sup> Karl Brugmann, *Griechische Grammatik*, München 1900<sup>3</sup>.

<sup>45</sup> Eduard Schwyzer, *Griechische Grammatik, Erster Band*, München 1939.

に倣って Bloomfield, *Language*<sup>46</sup> 349 がこの語を例として使い、その後数多くの教科書で用いられている。下記 p. 140 も参照。

(136) [134] “le terme de loi dans le sens juridique” : “loi”はもちろんそのまま「法律」だから、フランス語では「法則」と「法律」の単語の上での区別はないことになる。そのまま日本語にすることは難しいが、註では触れるべきだろう。

(137) [135] oza や nšo が切り出されないのは

(138) [136] (註 255) もちろんフランス語の現在分詞はラテン語の現在分詞(第 1 変化-ans/-antis, それ以外-ens/-entis)から来ているので、ラテン語の動名詞とは関係ない。2 種類の現在分詞が-ant 形に統合され、また動名詞由来の形と同音になった(ただし一方は性数変化しもう一方は不変)のは、フランス語の歴史の中で起きた変化の結果である。

(140) [137-8] φουκτός (-s ではない!)

lékhos (λέχος) thriksi (θριξί) 上記 p. 135 へのコメント参照。

(142) [139] “une langue bantoue actuelle” 「バントゥー語」という一つの言語があるわけではないので、「現代のバントゥー諸語の内の一つ」。

(147) [145] “forme”, “forme verbale”, “forme nominale” むしろ「形」、「動詞形」、「名詞形」。日本語で日常の用法とは別の「形式」という用語は、linguistic form の翻訳としての「言語形式」の略称として日本の言語学の中だけで通用する使い方だと思われる。

(148) [146] 図のすぐ下の例:sizlaprã

(158) [155] “abstraction faite de son expression par les mots” 「ことばで表されないとすれば(les mots 複数!)」。

(159) [157] “cette combinaison produit une forme, non une substance” 有名な一文だが、背景にあるのは当然 εἶδος (“that which is seen”=*forma*)と οὐσία (“that which exists”=*substantia*)の対立だろう。この考え方のその後の発展については、de Mauro の註 227 に詳しい。

(162) (註 282) 1154 年に最初の Angevin king として Henry II がイギリスの王位に就くわけだ

<sup>46</sup> Leonard Bloomfield, *Language*, Chicago 1933.

が、その名(Anjou)が示すようにこの系統もフランス本土に本拠地があった。イギリスの支配階層が徐々にイギリス化していくのは、彼らが段階的にフランスにおける領土を失って行き、またイギリス固有の貴族階級が力を蓄えていく過程と並行している。したがって、1154年に「フランス語を使用する王家の支配」が終了したかの印象を与える記述は訂正の必要がある。

(163) [161] (註 284) Sanskrit では「対で存在するのが通常のあり方で」ない存在でも、数が 2 であれば dual である。二人の人、二体の神など実体のある(と思われた)存在のみならず、抽象的な概念でも 2 つであれば dual で表す。したがって plural は数が 3 ないしそれ以上の存在ということになる。dual の代わりに plural が用いられるのは、古典文法から逸脱した後期の仏教系テキストや、より稀に、これも必ずしも古典文法に従わない叙事詩などに限られる(Renou, *Gramm. scte* 275)。

(165) [163] “Puisqu’il n’y a point d’image vocale qui réponde plus qu’une autre à ce qu’elle est chargée à dire” 「あることを言うために一つの音声的イメージが別の音声的イメージより適しているということはないのだから」。(Harris 訳: “No particular configuration of sound is more aptly suited to express a given message than any other such configuration”.)

(166) [164] (註 289) \*stēmi というような形は「存在しない」だけでなく「理論的に仮定」もされない。この語根(本来の PIE の形は \*stā- < \*steh₂-)からは root aorist が広く attest されているが、root aorist を持つ語根が root present を持つことは決してない。root aorist を持つ語根の present stem は必ず語根に何らかの拡張(この語根の場合は reduplication)を行う。同様に root present を持つ語根は、root aorist を持つことは決してなく、h₁es-のように aorist を全く持たないか、何らかの拡張された aorist stem を形成する<sup>47</sup>。なお、「語尾が -ēn である」というのは誤りで、-ē は(ここであげられている二つの語根のどちらも Attic-Ionic で -ā > -ē の変化を経た)語根の一部であり、語尾は -n である。

(166-167) [164-165] Harris の訳者註(p. 117)に指摘されているように、この箇所での phonème は、序論第 7 章およびそれに続く「付録」の部分とは全く違った意味で使われている。Harris はこれを CLG 編者の不注意に帰しているが、実際は何年も前に行われた音声学に関する講義の記録と、第 3 講義の一番最後に行われた valeur に関する講義の部分を、そのまま一冊の本の中に取り込むことに無理があったのだと思われる。

(167) [164] (註 292) 歯の震え音 → 舌先震え音

(167) [165] (註 294) Docht : dort, poche : Pore はむしろ [dɔxt] : [dɔkt], [pɔxə] : [pɔrə] であろう。

<sup>47</sup> K. Hoffmann, “Das Kategoriensystem des indogermanischen Verbums”, *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 28, 1970, 19-41 (= *Aufsätze zur Indoiranistik*, Bd. 2, Wiesbaden 1976, 523-540) 参照。

(170) [167] chaise と chaire : この doublets の社会階層的相違と方言による意味の逆転については W. von Wartburg<sup>48</sup> の有名な記述がある (*Einführung in Problematik und Methodik / Problèmes et méthodes* 第 2 章 2(b))。

(172) [170] (註 301) nous sortirons は未来形!。この phrase とその前の phrase は semicolon でなく comma でつながっていて一文をなす → 「天気によければ、我々は外出するだろう」 (partir でなく sortir !!)。

(173) [171] renseigner <知らせる、情報を与える>

(173) [171] 「アーキトレープ」は説明が必要。

(175) [173] que vous dit-il?

(182) [181] vacher <牛飼い>

(183) [181] Handwerk <手工業>、そこから<職>

(183) [181] plâtras <漆喰屑>

(183) [181] (註 312) εἶμι は Homeros では現在の意味を表しえたが、Attic Greek では現在形の ἐρχομαι に対する suppletive future として機能するようになった (Chantraine, *Dict. étym.* I 321)。Saussure の意図としては、δώσω、λύσω などと比べて ἐρχομαι — εἶμι のペアは共通の語根を持たず、s-marker もないという点で孤立しているということだろう。このあたりの事情は、ギリシア語の予備知識がある聴衆の学生にとっては、詳しく説明するまでもないことだったと思われる。

(187) [186] sprášivat' (s → š) спрашивать (-а-!)

(187) [186] (註 318) この動詞の本来の意味は中動相の πείθομαι が表す「信頼する」という意味で、能動形の他動詞はそこから後に発展したものだ、という点で学者の意見は一致していると思われる。Frisk, *Gr. Etym. Wb.*<sup>49</sup>, II 487, Chantraine, *Dict. étym.* III 868, Beekes, *Etym. Dict. Gr.* 1161.

<sup>48</sup> Walther von Wartburg, *Einführung in Problematik und Methodik der Sprachwissenschaft*, Halle 1943, Tübingen 1962<sup>2</sup>; W. v. W. et S. Ullmann, *Problèmes et méthodes de la linguistique*, Paris 1946, 1963<sup>2</sup>.

<sup>49</sup> Hjalmar Frisk, *Griechisches Etymologisches Wörterbuch*, 3 Bde, Heidelberg 1960-1972.

(191) [190] signi-fer 「旗手」 (*Oxford Lat. Dict.* 1758; Harris “standard-bearer”) 下記 p. 249 へのコメントも参照。

(191) [190] “Une valeur peut même n’avoir aucun rapport dans un élément concret (tel que *-eux* et *-fer*) et résulter de la seule ordonnance des termes” 「価値は(-eux や-fer のような)具体的な要素とは何の関係も持たず、単にこれらの要素の順序のみから生ずることさえある」。(Harris : “A value may even have no concrete element of its own, unlike *-eux*, *-fer*, etc. It may result simply from the order of elements.”).

(191) [191] “je cueille une fleur”

(199) [196] (註 336) 「ゲルマン祖語では、動詞の過去形は基本的には語幹の母音交替によって形成されたが」: PGmc の過去形形成については、この表現では不正確といわざるを得ない。そもそも過去形語幹の母音は何の母音と交替するかを明示する必要がある。そして母音交替で特徴付けられるのは強変化動詞だけである。ここでは基本的に現在語幹の e (場合によっては > Gmc i) と過去分詞のゼロ母音(sonant の場合は *-un-* etc.) に対して PIE の perfect 由来の o (> Gmc a) が交替する。弱変化動詞ではもちろんこうした交替は見られない。

(201) [198] この母音変化の例はすべて長母音。[ ] で発音を示すのなら、「ū [y:] は äu [eu] (さらに > [ɔy]) に変化した: hūsir → Häuser」とするべき。同様に「[ie] は [i:] へと移行した」。

(203) [200] 本文下から 6 行目: k<sub>2</sub> (*Mémoire* や *Recueil* に収録された論文の用法を見ると、k<sub>1</sub> = palatal k̄, k̄ (ないしは velar k), k<sub>2</sub> = labio-velar kʷ, qʷ。上記 p. 75 (註 173) へのコメントも参照。

(203) [200] (註 347) o または u が先立つ場合も同じ変化が起こることを Saussure は 1889 年に指摘している(“BOYKOΛOΣ”, *MSL* VI, 161f. = *Recueil* 417-8; cf. Fortson, *IE Language and Society*,<sup>50</sup> 70, § 3.39)。

(204) [200] (註 350) 括弧内の形に合わせれば \*wīro-s。

(204) [200] (註 351) Verner’s Law<sup>51</sup> の発表年を何年とすべきかの問題については、亀井孝「ペダントリーのために」、『一橋論叢』 69/5, 1973 (= 『言語 諸言語 倭族語・亀井孝論文集 6』 1992, 169-186) 参照。

<sup>50</sup> Benjamin W. Fortson IV, *Indo-European Language and Society*, London 2010<sup>2</sup>.

<sup>51</sup> Karl Verner, “Eine ausnahme der ersten lautverschiebung”, *KZ* 23/2, 1877, 97-130.

(204) [200] (註 352) CLG 本文の \*lipumé (および \*lidumé どちらも u と accent が抜けている) は 1pl. なので、「3 人称複数」は不要。これはもちろん接続法ではなく、強変化過去形の 1 人称複数 (Verner's Law の説明に用いられる PIE の perfect 由来の形で、能動単数は語幹にアクセント、それ以外は語尾にアクセントがあるもの)。この部分、CLG は第一講義の Riedlinger のノートにほぼ正確に記録されていたアクセントをほとんど省略しているため、意味が不透明になっている (cf. Komatsu/Wolf 1996, 35)。すなわち \*fapér は第 2 音節に、\*bróper, \*lípō は第 1 音節にアクセントがあり (\*lipumé は間違って ú にアクセント)、その結果有声化の有無の違いが出てくる。

(205) [201] “n’ayant pas de son laryngé” : 音声学の章 (p. 72 以下) で「喉頭音」とされたものは、現代の音声学でいう voice。Harris の訳 “being voiceless” が必要十分である。

(205) [201] (11 行以下) ここは有名な誤植の箇所、初版(1916)の “alors qu’il ne l’est que” 「前半だけしかそうではないのに全体を結合的なものとして」を再版(1922)以後 “alors qu’il ne l’est pas” にしたというもの (de Mauro 註 272)。田中克彦はあちこちで、亀井孝が de Mauro 以前にこれを指摘していたと書いている (たとえば岩波文庫版コセリウ『言語変化という問題』解説 p. 426。ちなみにこの翻訳、最初の文が「言語変化という問題は、**あきらかに**一つの根本的な矛盾をかかえている」と始まるのだが、[原文](#)<sup>52</sup>の *aparentemente*、[独訳](#)<sup>53</sup>の *anscheinend* はむしろ「一見したところ、表面上は」の意味であり、その「矛盾」の解決が以下の主題である、という論旨である)。

(205) [202] “C’est le chaos, car ainsi on supprime toute succession chronologique des événements” 「このように(変化という)出来事の相互の順序関係を見捨て(して一緒に)すればカオスになってしまう」。

(207) [203] “\*rīssus → rīsus” CLG の macron を省略してはいけない。

(213) [209] (註 373) *teinō* (< \*ten-i-ō) : \*-ten-s-a (> 代償延長で -tēna,  
表記は -ei-)  
*phainō* (< \*phan-i-ō) : \*-phan-s-a (> 代償延長で -phāna,  
Attic-Ionic 方言で -phēna)

(217) [213] (註 380)  $\Xi\epsilon\nu\omicron\phi\tilde{\omicron}\nu$

(220) [216] 「すべての [o] は、アクセントがある場合には [eu] に、アクセントの前では [ou] になった」: これは発音ではなくて文字の問題である。[ ] は外すべき。下記 (227) [222] へのコメントも

<sup>52</sup> Eugenio Coseriu, *Sincronía, diacronía e historia: el problema del cambio lingüístico*, Madrid 1958, 1973<sup>2</sup>.

<sup>53</sup> *Synchronie, Diachronie und Geschichte. Das Problem des Sprachwandels*, übersetzt von Helga Sohre, München 1974.

参照。

(221) [216] ap-érkhomai (ἀπ-έρχομαι); (註 399)も-erkh-o- (-ερχ-ο-)

(221) [216] jug-iez

(222) [217] “Le phénomène phonétique n’a pas brisé une unité, il n’a fait que rendre plus sensible par l’écart des sons une opposition de termes coexistants” 「(この) 音声的な現象は、一体性を破壊したのではなくて、別々の音にすることによって、それまで(潜在的に)あった対立をよりはっきりさせたのである」

(222) [217] (註 406) 「語尾である指小辞 *ellus*: 語の後半部分という意味では「語尾である」というのも可能かと思われるが、厳密には語尾(*inflectional ending*)は-s で(-u-は *thematic vowel*)、それに先立つ部分が語幹である。したがって「語幹末の接辞(指小辞)-*ell*-の *e* の上にアクセント」とすべき。

(225) [220] *indigne*

(226) [221] “C’est d’elle que relèvent toutes les modifications normales de l’aspect extérieur des mots qui ne sont pas de nature phonétique” 「音声的な性質の変化以外の、単語の外面に関する通常の変化は、すべて類推に基づいている」

(227) [222] “L’analogie s’exerce en faveur de la régularité” 「類推は規則性が増すように作用し」

(227) [222] (註 409) 単語は数値ではないので、「単語の積」というのは無意味である。当然ながら類推の「比例式」は数式ではない。“A is to B as C is to X”という関係の図式的表現と理解されるべきである。

(227) [222] (註 410) *probāmus* のアクセントは「語尾」ではなくて語幹末の母音(*thematic vowel*)にある。(V)Latin の *atonic* の *o* がフランス語の歴史上二重母音[*ou*]になったことはなく、*closed o* から *u* に発展し、それを綴り字の上で *ou* と表記したもの。上記(220) [216]へのコメントも参照。

(229) [223] “Toute liberté prise à son égard était donc une anomalie” 「この完全性を損なうような勝手な振る舞いはすべて異常なものとされた」

(234) [229] “la grammaire hindoue” 「インドの土着(または伝統)文法」、つまり Pāṇini 文法のことである。上記(10) [15]のコメント参照。

(235) [229-230] ここで扱われているのは Lachmann’s Law で、厳密にはまだ未解決の問題である。問題の語形でラテン語が長母音を持つことは、いくつかの種類の証拠から確認できる(ロマンス語での発展については Saussure も触れている)。やっかいなのは、この現象が起こるのは語根末が有声子音である場合だが、すべての有声子音について起こるわけではないことである<sup>54</sup>。\*ag-tos のような形が PIE から継承されたものではありえないことは、Saussure はすでに 1889 年に議論している(*Recueil* 431)。Saussure の解決策は、音法則としての説明ではないので、この変化の条件を示すという意味では解決になっていない。もっとも最近の試みとしては: Jay Jasanoff, “[Plus ca change. . . Lachmann's Law in Latin](#)”, in J. H. W. Penney, ed., *Indo-European Perspectives*<sup>55</sup>, 2004, 405-416; earlier version in *Harvard Working Papers in Linguistics* 8 (2003)。Jasanoff は同じテーマで 1999 年の [日本語学会第 118 回大会](#) で講演を行った(「ラテン語ラッハマンの法則再考 —ソーシャル、クリウォーヴィッチ、キパルスキーが残した問題」……ジェイ・ジャザノフ)。

(235) [230] (註 423) ここでの方式に統一するなら h2eǵ-。

(237) [232] “Voyez ce qui a été dit plus haut, p. 195, des composés tels que *beta-hūs* et *redo-lich*, et p. 213 de la flexion nominale indo-européen.” 「上で(p. 197) *beta-hūs* 「礼拝堂」や *redo-lich* 「理性的な」のような複合語について、および(p. 217)インド・ヨーロッパ祖語の名詞活用について述べたことを参照。「名詞活用のような合成形!!」ではない。

(238) [233] ここで次頁で「接尾辞-tāt-」は常に長母音。

(238) [233] aēnus pour \*aes-no-s : このパラグラフの pour は「～に由来する」を意味している。aēnus は子音 cluster の-sが規則的に消失したため代償延長を起こした形で(浸食ではない)、名詞から派生して「所属や材質」を表す本来の-no-接尾辞の形を示している(「銅製の」)。これに対して-āno- (ここでは扱っていない-īno-, -ūno-なども)は、本来の接尾辞の形ではなく、先立つ名詞末尾の長母音と同じ接尾辞-no-が融合して、新しい接尾辞と理解されるようになった、というのが論点である。したがって aēnus は接尾辞の前の名詞が長母音に終わらない形として、対比されていることになる。M. Leumann, *Lat. Laut- u. Formenlehre*<sup>56</sup> § 294 参照。

(238) [233] (註 429) 「名詞を形容詞化する」→「所属・材質を表す」

<sup>54</sup> N. E. Collinge, *The Laws of Indo-European*, Amsterdam 1985, 105-114.

<sup>55</sup> J. H. W. Penney, ed., *Indo-European Perspectives: Studies in Honour of Anna Morpurgo Davies* OUP 2004.

<sup>56</sup> Manu Leumann, *Lateinische Laut- und Formenlehre*, München 1977.

(239) [234] (註 433) -ant-はラテン語の第 1 活用(amāre など)に由来し、-ent-はそれ以外の活用に由来する、ということは、ラテン語に慣れている「講義」の聴衆には自明だったはずである。フランス語では 7-8 世紀ころに-ant-の形がすべての動詞に広まって、-ent-の形は、動詞のパラダイムから外れた化石的な形にのみ残ることになった、ということはフランス語の歴史でよく知られた事実である。

(245) [240] 4 行目 *escarboucle*

(247) [242] *gaz* 「ガス」(和訳としては意味が必要)。

(249) [244] *potis sum* 「私は主人である」。CLG はきちんと訳を与えている。

(249) [244] *signifer* 「旗手」(Harris “standard-bearer”) (註 450 も)。*agri-cola* とともに動詞語幹が複合語の後分で、その意味上の目的語が前分になるタイプの複合語で、ともに職業を表す。上記 p. 191 も参照。Saussure は「講義」が行われている時期(1909 年)に“*Sur les composés latins du type agricola*”という論文<sup>57</sup>を発表している。

(254) [249] “*c’est renverser les termes, puisque c’est au contraire au nom de la correspondance mare : mer que je juge que a est devenu e, que e final est tombé, etc.*” ここでの *termes* は *syllogism* の *terms* と考えると理解しやすい。つまり「(そういうことをすることは)前提と帰結の順序を逆転させることになる。a が e になり、語末の e が脱落したと判断できるのは、(先にあげた論法とは)逆に、ラテン語 *mare* とフランス語 *mer* が対応するからなのだ」。Harris はここでは意識している (... is to put the cart before the horse)。

(254) [250] “*Messieurs! ... est identique à lui-même*” 「(その都度若干の発音やイントネーションの違いで発音された) *Messieurs!* という語が同一(の言語的単位)である」。

(261) [254] ῥήτορος

(264) [257] (ロシア語 *napisát’ ...*) 「ロシア語」は必要。

(265) [259] “*L’étymologie de bonus n’est pas fixée parce qu’on remonte à dvenos; mais si l’on trouve que bis remonte à divis et qu’on puisse par là établir un rapport avec duo, cela peut être appelé une opération étymologique*” 「*bonus*<よい>の語源は、(その単語が Archaic Latin の) *dvenos*

<sup>57</sup> *Recueil* 585-594.

に遡るという事実(のみ)によって確定するわけではない。bis<2 度>が(Archaic Latin の)dvis に遡ることが分かり、そのことで(bis が数詞の)duo<2>と関係していることが明らかになってはじめて、(bonus と dvenos を結びつける)語源学的作業ができるのだ」。なお、有名な [Duenos inscription](#) (ラテン語の歴史で [Praeneste fibula](#) に次いで古い、または P. f.が偽造だったら、最古となる)が発見されたのは 1880 年だから、講義当時まだ記憶に新しいニュースだったはずである。

(268) [262] 「ロシア語では、ドイツ人を Nêmsy (Нѣмцы 複数形!)と呼ぶ」: 第 3 講義の学生ノートには、このロシア語の部分はなく、代わりに Sanskrit の mleccha-が(mlêchâs として)記録されている; Engler no. 2854 (p. 437; Constantin と Joseph), Harris/Komatsu 1993, 12 参照(影浦・田中 2007:19 「ヒンドゥー語」!!)。Collation Secheyay, 29 は Sanskrit 形を記録していない。Saussure 自身のノート(Écrits 308, 松澤 500)に Sanskrit 形が残っているので、2 人の学生以外は Sanskrit 形を筆記できなかったものと思われる。ロシア語形は、ヨーロッパ人により身近な形を出すために編者が置き換えた可能性がある。

(269) [262] 現在は使われなくなった地名「カフラーリア」については註が必要。

(276) [270] “Leur origine commune résulte de la matérialité des faits” 「両者が共通の起源から来ていることは事実問題として確認できる」: matérialité d'un fait (des faits)は「事実性」を強調する idiom のようなもの。Harris 訳 “there is concrete evidence for their common origine”。従って註 485 は不要。

(278) [272] “L'unité des idiomes apparentés ne se retrouve que dans le temps” 「親縁関係にあるいくつかの固有語がもとは一つだったということは、時間軸を考慮してはじめて見て取れる」。Harris 訳 “The unity of related languages is to be traced only through time”。

(280) [274] “ainsi c et g latins devant a se sont changés en tš, dž, puis š, ž (cf. cantum → chant, virga → verge), dans tout le nord de la France sauf en Picardie et dans une partie de la Normandie, où c, g sont restés intact (cf. picard cat pour chat, rescapé pour réchappé, qui a passé récemment en français, vergue de virga cité plus haut, etc.)” 「たとえば、フランス北部全土で、ラテン語の c, g は a の前でまず tš, dž に変化し、次いで š, ž となった(cf. cantum → chant, virga → verge)。ただしピカルディーとノルマンディーの一部は例外で、ラテン語の c, g はそのまま残った(cf. ピカルディー方言で標準フランス語の chat は cat, réchappé は rescapé となる; 後者は最近になって標準フランス語に取り入れられた。また上記 virga はピカルディー方言では vergue である、等々)。vergue という形は「講義」全体でこの箇所には言及されていないので、「virga に由来する vergue は、上で指摘した」というのは意味をなさない。plus haut というのは 4 行上のこと。

(282) [277] “se confondre même sur un certain parcours” 「ある程度の範囲にわたって一本に融合してしまっている」。

(288) [284] [canton](#) はスイス連邦を構成する 26 の行政単位だから、「郡」という訳は不適切。「カントン」とするか、せめて「県」(ないしは「州」)の方が適切だと思われる。

(290) [286] “ainsi on se représentait les Slaves, les Germains, les Celtes, etc., comme autant d’essaims sortis d’une même ruche” 「こうして、スラヴ人、ゲルマン人、ケルト人等々は、ひとつの巣箱からそれぞれ分かれていった蜂群(のようなもの)だ、と理解された」。

(290) [286] “ces peuplades, détachées par migration de la souche primitive, auraient porté avec elles l’indo-européen commun sur autant de territoires différents” 「これらの諸民族は、原初の根元から切り離されて移民していき、それぞれ異なった地域にインド・ヨーロッパ祖語をもたらしたものだ」とされた」 indo-européen commun = Proto-Indo-European (= (Ur-)Indogermanisch)。

(290) [287] “les différenciations dialectales ont pu et dû se produire avant que les nations se soient répandues dans les directions divergentes” 「方言的な分化は、諸民族がばらばらな方向に向かって広がっていく以前に、起こりえたし、起こっていたに違いない」。nations はここでは「国家」ではない。

(295) [293] le germanique commun ゲルマン祖語 (= Proto-Germanic, Ur-germanisch)

(296) [294] nwaye (下に点)

(296) [294] (註 492) *Oxford Lat. Dict.* は clutus という形はギリシア語形をまねて invented されたもの、としている。ここで例に挙げるには不適切。

(298) [295] Bopp écrivait qu’ “il ne croyait pas que …” 「「… ことを、自分は信じていなかった」と書いており」 間接話法!。

(298) [295] “comme s’il était possible de formuler, même dubitativement, une semblable supposition” 「まるであたかも、まずありそうもないとはいっても、そんな想定が可能であるかのように」(imparfait で非現実の仮定!!)。Harris 訳 “as if it were possible to entertain, albeit speculatively, such a theory”。

- (298) [295] 人名の場合は-sを発音する<sup>58</sup>(ガストン・パリヌ)。
- (299) [297] *langue collatérale* 「(ほかのインド・ヨーロッパ諸語と) 対等の立場にある言語」
- (300) [297] (註 498) *le slavon ou paléoslav* つまり Old Church Slav(on)ic は、9 世紀後半に初めて記録されたスラヴ語派の最古の形で、事実上 Proto-Slavic の役割を果たす。スラヴ人が東ヨーロッパとロシアに広く拡散するにつれて 1100 年頃を一つの目処に、各地方のより新しい形が発展し、これらをそれぞれの地方の名前を冠した「教会スラヴ語」Church Slav(on)ic という。(ここでの記述は「ロシア教会スラヴ語」に相当する)。これらは OCS とは区別された別々の言語で、今日のスラヴ諸語の原型に当たるものである。詳しくは『言語学大辞典』の「教会スラヴ語」の項を参照。OCS にしても写本自体は 11 世紀を遡るものではなく、また 11 世紀以前の写本でも言語的に新しく OCS として分類されないものもある。OCS 自体は地域的には南スラヴ語で、以前は「古代ブルガリア語」とも呼ばれていた。したがってこの註に書かれていることは全部間違いである。
- (303) [300] 下から 2 行目 *h2élyod*
- (304) [301] “On n’a pas à justifier les linguistes de l’idée assez bizarre qu’on leur prête de restaurer de pied en cap l’indo-européen, comme s’ils voulaient en faire usage” 「言語学者がインド・ヨーロッパ祖語を、実際に使うことができるように、完全な形で再建しようとしている、という奇怪な考えが流布しているが、そんな言語学者はとでも正当化できない」。
- (306) [303] “il n’est pas indispensable de caractériser leur qualité positive” 「これらの音が実際にどういう音であったかと決定することは必ずしも必要ではなく」 具体的な音価よりもむしろほかのどの音と区別されていたかが重要だということ。
- (307) [304] (註 506) *Alemannic* はドイツ語の方言としては、スイスのドイツ語圏全域、隣接するドイツ南西部(Baden-Württemberg 南部)、オーストリア西端(Tyrol の一部)に分布する。「アルプスのふもとに住むアレマン人」というのはこの地域の住民ということと思われる。
- (309) [307] *Aryās* 現代の出版物としてもっとも註釈が必要な用語。CLG の出版された 20 世紀の初めから第 2 次大戦まで、*ārya* という言葉は「(PIE を話していた) 原初のインド・ヨーロッパ人」という意味でしばしば用いられた。これはドイツ語圏だけでなく、英語圏でも、またここにあげられた *Pictet* のようにフランス語圏でも見られる用法だった。他方で、この用法に消極的な学者も少なくなかった。周知のように *Nazis* がこれを政治的に利用したため、戦後はこの用語自体を嫌悪する風潮が一時主流になった。現在は、この語を自称として用いた記録があるインド語派とイラン語派に

<sup>58</sup> *Le Petit Robert 2. Dictionnaire universel des noms propres*, Paris 1990, 1367.

ついでのみ正当性がある、ということで学会は一致していると思われる。CLG の編者がここで括弧付きにした理由は明らかではないが、Gautier のノート(Engler, no. 2208, p. 499)は“des Indo-européens (*Aryens* comme il (= Pictet) disait)”と記録しているので、Saussure 自身が Pictet の用法に必ずしも賛同していなかった、という可能性もある。Saussure がまだ若かった時代(1878 年)に、自ら大きな影響を受けた Pictet の業績の紹介とその著書 *Les origines indo-européennes ou les Aryas primitifs*(p. 299 [297]で言及されている)の書評を書いているが(*Recueil* 391-402; esp.395ff.)、そこでは les indo-européens と les Aryas を特に区別なく使っている。30 年以上後の CLG で後者がこの箇所のみ、しかも留保付きで使われているということは、この用法に反対とは言えないまでも、少なくとも積極的ではなかった、と言えるだろう。

(309) [307] (註 508) バクトリア (Bactria) は現在のアフガニスタン東北部と隣接するウズベキスタン・タジキスタンにまたがる地方で、アフガニスタン西部やイラン東北部(Khorasan)は入らない。ここに述べられているように Pictet はインド・ヨーロッパ祖語の原郷(Urheimat)をバクトリアに想定していた(*Recueil* 398)。

(310) [307] “si elle ne peut les fournir, cela tient, selon nous, aux causes suivantes” 「言語がそのような情報を与えることができないのは、私には以下の理由によると思われる」直前の文で「できない」と言っているので、さらに「もしできないならば」というのは繰り返しになる。これは朝倉文法事典で「主節の理由、問いの動機」として分類されたものに相当する(Si je suis gai, c’est que j’en ai sujet 「私が嬉しがっているのは嬉しがるわけがあるからだ」)。

(310) [308] “un exemple des témérités d’autrefois” 「かつてのいくつかの無茶な試み(pl.!)の一例」

(310) [308] “étant donnés *servus* et *servāre*, on les rapproche — on n’en a peut-être le droit” 「まず *servus* と *servāre* という単語があるので、実際には正しくないのだが、この(部分的に類似した)二つの語を(語源的に繋がりがあつたものとして)比較し」

(310) [308] “les idiomes asiatiques” ここでは「インド・イラン語派の諸言語」。

(311) [309] “De même le ‘beau-frère, mari de la soeur’ ne porte pas le même nom que les ‘beaux-frères, maris de plusieurs soeurs entre eux’” : 第 2 講義の Riedlinger のノート(Komatsu/Wolf 1997, 91; Engler no. 3227, p. 502)は微妙に違う。この 2 種類の brother(s)-in-law に関する用語が(Komatsu/Wolf の解釈では)ラテン語では欠けている、としている。Saussure が意図したのがどちらなのかは解決できない問題だが、編者による CLG の本文を前提とすると、EGO からの関係として refer する場合と、姻戚関係はあるが家族には属さない外部の人間同士の関係についてという場合の区別

のように思われる。(註 513, 514)にあげられた二つの形は、この context で与えるにはどちらも問題を含んでいる。gambrós はほとんどの場合 son-in-law (つまり娘婿)を表す(Buck, *Selected Synonyms*<sup>59</sup> 126, 風間 1984<sup>60</sup>, 283ff.)。これに対して kēdestés は、「相続関係に関与しない外部の姻族」を強調する用語として、妻の父親、娘の婿、妹の婿のいずれにも用いられる(M. Miller, “Greek Kinship Terminology”<sup>61</sup>, *JHS* 73, 1953, 46-62)。Saussure はまだ 20 歳代の 1884 年に、“Termes de parenté chez les Aryas”という短い論文を書いているが(*Recueil* 477-480)、そこではこの二つの用語は扱われていない。また Saussure が利用したことが確実な、Delbrück, *Die indogermanischen Verwandtschaftsnamen* 1889<sup>62</sup>は、この二つの用語を検討しているが、どちらも一義的に特定の親族関係を表すわけではないことに注意する必要がある。

(311-12) [309-10] ここで行われている domus - dominus の関係の証明がいかにか画期的であるかは、Calvert Watkins, “Etymologies, equations, and comparanda: Types and values, and criteria for judgment”, 296f.<sup>63</sup> に詳しい。

(313) [311] “état construit” 普通 status constructus (英語では [construct state](#))といわれるもの。『言語学大辞典』では「連結態」と訳す(ヘブライ語の項、および術語編)が、この訳語が定着しているとは言えない。ヘブライ語を学習する人は大抵ドイツ語か英語の文法書から入るので、status constructus または construct state という方が何を指しているのかすぐ分かる。(アッカド語を始め Semitic の文法で広く使われる)。どういう概念かという、名詞 A と名詞 B がこの順で A+B の緊密な単位を作り、A が被属格、B が属格の意味を持つ。この単位内では A は atonic、B は tonic で、結果として A は母音が reduced で marked の形、B はより full な unmarked の形となる。起源的にあった格語尾の消失に伴い、この関係を表すのは名詞本体の形の変化のみということになる。名詞が construct state になると、そうでない時とは違った(reduced vowel の)形になり、後続する名詞に対する被属格として機能するというわけである。

(313) [311] (原注 1) l'esprit doux (spiritus lenis)は、実際は語頭の母音が h- (spiritus asper)に始まらないことを表しているので、現代の音声学的な意味で母音の前に glottal stop があつたかどうかは(可能性はあるが)不明である。なお「弱い有気音」というのは何のことか意味不明。

(315) [313] “ce problème-là n'est pas insoluble” 「この問題を解決することはできなくもない」

<sup>59</sup> Carl Darling Buck, *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*, Chicago 1949.

<sup>60</sup> 風間喜代三『印欧語の親族名称の研究』1984.

<sup>61</sup> M. Miller, “Greek Kinship Terminology”, *Journal of Hellenic Studies*, 73, 1953, 46-62

<sup>62</sup> B. Delbrück, *Die indogermanischen Verwandtschaftsnamen* 1889, 523 [145]

<sup>63</sup> Philip Baldi ed., *Linguistic Change and Reconstruction Methodology*, Berlin 1990, 289-303 (= Calvert Watkins, *Selected Writings I*, Innsbruck 1994, 332-346).

(315) [313] “il ne peut persister que par hasard” 「(ある特徴が)存在し続けるとしたら、それは単に偶然、たまたまそうなった、ということではない」

(317) [316] (註 518) vi-ではない。Semitic の *prefixed conjugation* の *yi-*。『言語学大辞典』3 巻, 927 <表 6> で「接頭形」 $yi-C_1C_2\acute{o}C_3$  および  $yi-C_1C_2C_3\acute{u}$  に相当する。

4

Saussure の「一般言語学講義」は、フランス語圏でも学問の中心とはいえない地方大学で、数人から十数人のごく少人数の学生を相手に行われた。ただ、これらの学生は、現存するノートから判断すると、その知的水準はきわめて高かったと推測できる。19 世紀末から 20 世紀初めのヨーロッパの高等教育では、古典語(ラテン語は当然、ギリシア語もかなりの程度)はすでに習得済みであったことが、講義の前提となっているものと思われる。この講義を書物化した CLG を現時点で翻訳して日本の読者に提供する場合、読者側にそのような前提は当然通用しないのだが、まさにそれ故に、翻訳者側にそのギャップを埋める努力が要請される。この「新訳」は、残念ながらそのようなギャップを多くの点で残したままで刊行されたといわざるを得ない。

(くまもと・ひろし 名誉教授)